



フィールドノート——わたしの研究余話

## ジーナ

「教師生活二五年、ワシやあゝこんなに成績の悪い学生に会ったのは初めてだ!!」、なんていつも叫んでるのは、「ド根性ガエル」に出て来る高校の先生である。かくいう私は「フィールドワーカー二五年!」になっちゃった。

シベリアや満洲の奥地で消滅の危機に瀕した言語や文化の研究に勤しんでいる、というと何やらカッコイイように聞こえるが、オレにとってフィールドワークっていったい何だろう?! 文字も無いような「ことば」を調べるということは、まずもって話者との「共同作業」である。たとえば、知りたいのが「ある文法的事実」だとしても、目の前の相手はとにかく一人の人間である。だから現地調査はいつも、出会いと別れの繰り返しである。

初めてジーナに会ったのは、一九九六年の七月のこと

## 風間伸次郎

だった。これも初めて、私はマガダンという街にやって来た。カムチャッカ半島の付け根あたり、北緯六〇度にあるこの街では夜も一〇時ぐらいにならないと日が沈まない。と思うと、三時ぐらいにはもう夜が明けてしまうのだ。

正しくはジナイダ、苗字をバブツェヴァと言うのだという。そのオバちゃんは齡六〇、学校の先生をしていたが、今は年金生活だそうだ。「となりのトトロ」のような体形で、歩く姿はペンギンのよう、大きな頭は鳥の巣のようだ。皺の奥の眼はいたずらっぽく笑っていて、象のように優しげだった。自分の母語であるエウエン語に深い愛情と関心を持っていて、定年後は自分でも少しずつ書き留めているのだという。

それから彼女との付き合いが始まった。二〇〇〇年の春

休み、私はエウエンの人々ばかりの村まで行くことにした。エウエンはツンドラに住むトナカイ遊牧民である。マガダンからまたプロペラ機に乗って、さらにそこから七〇キロ、六輪トラックで凍ったツンドラを行く。トラックのタイヤは私の背丈ほどもあった。ところがジーナも行くと言うではないか?! 血圧も高いというのに、ジーナはすっかり張り切っていた。九〇分テープでたっぷり二〇本近く民話や伝説を録音してきた。街に帰るとずうーっとその書き起こしである。校長先生だった、というジーナは厳しい人で、ちっとも私を休ませてはくれなかった。

私が滞在していた期間だけではなかなか仕事は終わらない。すると何とジーナは日本にもやって来た。二〇〇一年、二〇〇三年、二〇〇四年、とそれぞれ二週間ほどの滞在だったが、おかげでオレたち二人はどんどん書き起こしや翻訳を進めていくことができた。

二〇〇九年にはやっと本も出した。二〇一三年現在、次の本の編集も最終段階に入った。本ができたならジーナは何と言ってくれるだろうか。そう言えば年賀状が来ていたな。「シンジロー、新年おめでとう。おまえも奥さんも子供も元気で過ごさない。いつでも手紙を書きなさい、ずっと待っているから。病気をしないように。ジナイダ。」オレが送ったカレンダーは着いたのかなあ?! 今度生まれた娘

の写真も送ったんだけど、などと思っていた矢先だった。

一月三〇日、孫のダーシャからのメールは、ジーナの死を告げるものだった。雪道で、倒れてそれっきりだったという。心臓だった。時は流れて、ジーナももう七七歳だった。今度の本は間に合わなかった。「待っているんじゃないのかよ、人の病気の心配をしている場合かよ!」私はただ空を見上げるのみである。

「フィールドワーク」なんて、学問上の成果でもないし、めくるめく冒険譚でもない。私にとってのそれは、その人と過ごした時間のことである。



在りし日のジーナ氏

かざま・しんじろう 一九六五年生まれ。東京外国語大学大学院国際学研究院教授。言語学。